

テスト1の1

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

渡部（俺、中学三年）は吹奏楽部員で、榊井（中学三年）は陸上部キャプテンである。その陸上部は、満田先生の指導の下、他の部活に所属する足の速い生徒をも集め、毎年＊駅伝大会に参加し県大会に進出していた。しかし今年からは美術部顧問だった上原先生が顧問に代わっていた。

以下は、大会前のある日の場面である。

「今日は＊タイムトライアルね。六時ジャストに出走するから、各自でアップして。それで、最後に流し入れて、筋トレとストレッチで終了」

俺が輪に加わったのを確認すると、上原がメニューを発表した。

二学期に入って四回目のタイムトライアル。俺はとても気持ちよく走った。真夏とは違って、六時を回ればちゃんと日が傾く。暑さを身体にしみこませながら走るのも悪くないけど、日が静まりかけている中を走るのはもつといい。何より身体が滑らかに動く。それはみんなも同じようで、メンバーのほとんどがよい記録を出していた。

設楽は十分五秒でもうすぐ九分台に入りそうだし、大田は十分十二秒、ジローは十分五十二秒。中でも俊介はとりわけよかった。このところの俊介は勢いがある。のびやかで身体が弾んでいる。素直な俊介の性格が走りにもよく出ていて、走りこめば走りこんだだけ結果がついてきていた。ただ、榊井だけは九分五十四秒と振るわなかった。もちろん、俺たちより速い。だけど、それだけだ。榊井の走りがこんなものではないのは、陸上部でない俺でも知っている。榊井が先手を打ってかわすから、誰も触れようとしないけど、本調子ではないはずだ。「今週の土曜は三回目の試走だし、そろそろ区間を決めないといけないと思うんだけど。先生もエントリ―提出しないとイケないだろうし」

練習後のミーティングで、榊井が言った。

1区と2区はぜひぶんに決まっていたけど、それ以外は今のところ未定だ。「一応考えてみたんだけど、おれが言っているんですか？」

榊井が「A」と、上原は「もちろん」とうなずいた。ジローは「おお、いいんだ」とはしやぎ、既に2区に決まっている大田も「やつとわかるのかよ」と偉そうに言った。みんな誰がどの区間を（a）マカサレルのか、「B」だった。

「1区と2区は前決めたとおり、設楽と大田。3区がジローで、4区が渡部、5区が俺で、ラストが俊介」

榊井はみんなの注目をよそに、さらりと発表した。それなりに重大発表のはずなのに、気持ちを込めずに言い切った。あまりにあつけない言い渡されたから、うっかり流しそうになったけど、区間を確認すると同時に全員が戸惑いの表情を浮かべた。

3区は一番緩やかなコースだからジローなのはわかる。4区と5区の違いはわからない。俺でも俊介でもいいだろう。おかしいのは最後だ。1区と6区は要だ。1区が設楽なら、アンカーは榊井だ。そんなことは駅伝に詳しくなくてもわかる。確かに最近の榊井の走りには、精彩がない。理由はわからないけど、力が感じられない。だけど、アンカーを走るのは榊井しかない。俊介は完全に（b）面喰らっているし、大田や設楽も俺と同じことを思っているはずだ。

「よくわからないけど、6区は榊井君だと思っ」

しばらくしてから、①上原が遠慮がちに言った。

「それもあるんだけど、最後までいう状況で襷が来るかわからないから、今一番力がある俊介がいいかなって」

榊井はあっさりと答えた。

「でも、駅伝ってそれだけじゃないっていうか」

上原が言いたいことはよくわかる。みんなじつと上原を見た。

「そうだけど、ほら、みんなだって気づいているだろ？ 今のおれの走りは不安定だし、力もない。それに比べて俊介は、すごく乗ってる。ここぞってところで力が出るはずだし。とりあえず、これがベストだと思う。ま、これで行く」

榊井は精一杯明るく切り上げようとしたけど、上原は納得できないようだった。「榊井君の言うことはわからないでもないけど、やつぱり変だよ」

「変なことないですよ。自分ながらいい配置だと思うんです」

名古屋 東海中学校（平成25年度）

「榊井君、最後の駅伝なのにな？」

「そんなことは関係ないです。大事なことは勝つことですから」

軽やかだった榊井の言葉づかいが丁寧になっている。榊井はいろんな思いを陽気さでカバーできなくなっているのだろう。たぶん、今、突き詰めるのはよくない。けれど、上原は食い下がった。

「だけど、5区と6区は逆じゃないかな」

「先生に駅伝がわかるんですか？」

「ううん、わからない。それでも榊井君がアンカーを走るべきだと思う」

「そんなの先生の勝手なイメージです」

「でも、この配置がおかしいのは私でもわかるよ」

上原が珍しくはつきりと言い、榊井は困ったように宙に目を向けた。設楽や俊介はどうしたものかと考えている。誰かが何かを言うべきなのだろうか。みんながお互いにかがっているところに、

「満田先生が戻ってきたくれたらな」

榊井がぼそりと言った。

その瞬間、②俺は胸の中がひんやりした。自分でも驚くくらい身体の底までが冷たくなった。榊井はほかにこの場を収める方法が思い浮かばただけかもしれない。だけどだ。こんなにすべてを否定してしまう言葉はない。

「そっか。でも、そればかりは教育委員会に言わなきゃ無理だな。じゃあ、しかたないかな」

上原はみんなの空気が滞るのを食い止めるように、声の調子を上げた。

みんなも「まあそうだよな」「俊介二年生でアンカーとかかつこいいじゃん」などと口にした。

俊介も「うわー僕、緊張する」とおどけている。

なんだろうこれは。誰も間違っていないけど、痛々しい。つくろっているのは、俺だけじゃないんだ。誰だって、本当の部分なんて見せられるわけがない。生きていくってそういうことだし、集団の中でありのままでいられるやつなんていない。大田は必要以上に悪ぶっているし、榊井は自分をコントロールしているし、設楽はびくついて周りの顔色ばかり見ている。そして俊介だって……。何もつくろっていないやつなんていないのだ。

「俺が3区でお前が4区ってことはさ、襷渡すってことだろう？ せめてもう少し仲を深めとかないな」

いや、いた。世の中で唯一何もつくろっていない人間が。解散と同時に、ジローは俺のところへやってきた。

「は？」

「だから、俺と渡部で襷リレーするわけじゃん。スムーズにいかせるためにもさ、息が合っていないといけない」

「お前には影はないのかよ」

「え？ あるよ。ああ、もう日が陰ってるから見えないのか」

ジローは不思議そうに自分の足元に目を落とした。こいつは本物の馬鹿だ。

「どれだけお調子者のやつでもちゃんと裏があるじゃん」

「裏？ 何の話だ？」

「明るいやつにも暗い一面があったり、陰湿な部分を覆うために陽気にふるまったりさ。そういうもんだろう？」

「なんだ、それ？」

「それなのに、お前には影もなければ裏もない」

ジローはまったく意味がわからないようで、思いっきり眉をひそめた。「お前には一生わかんないよ」

③俺はジローを振りきると、グラウンドを出た。

どう説明したって、ジローにはわからない。そして、ジローにはわかる必要なんてないのだ。

言っではないけない言葉である。皮肉や嫌味ばかり言っている俺ですら、ぞつとした。馬鹿とかアホとかとはまったく違う種類の言葉。一言言っではないけない人間が、一言言うべきでない相手に、最悪の言葉を投げた。「満田先生が戻ってきてくれたらな」榊井のつぶやきは、俺の耳の底にどんよりと引っかかっていた。みんなが帰ったあと、俺はなんとなく校門あたりをうろついていた。俺がどう

こうできるなんて思ってもないし、どうしようってこともない。でも、④このま
まじやだめだろうとは思った。

「あれ？ 渡部君何してるの？」

一時間ぐらい経ったのだろうか。財布を手にした上原が校門の近くにやってき
た。

「先生は？」

「夕飯の買い出しに。今日はまだまだ仕事が終わるそうにないから、スーパーに
お弁当でも買いに行こうかなって」

「ああ、そっか」

「もう暗いのに。早く帰らないと」

上原は空を見上げた。日は完全に沈んでいる。

「あのさ、本気じゃないだろうし」

「何が？」

「いや、ほら、今満田がいても困るだろう？ なんか練習のペースが崩れるし、
柁井だってそんなことわかってるっていうか」

俺が迷いながら言葉を並べるのに、上原はくすくす笑い出した。

「なんだよ」

「こんなに優しい中学生を初めて見たなと思って」

「は？」

何言ってるんだこいつ。優しいなんて、俺のどこをどう取っても当てはまらな
い表現だ。

「まさか、それが言いたくてここにいたの？」

「たまたまいたら、先生が出てきただけだ」

「そっか。じゃあ、もう遅いし車で送ってくよ」

「そんなのいいよ」

俺は首を横に振った。今ごろばあちゃんは、心配して家の前で待っているだろ
う。それを上原に見られるのは嫌だった。

「だめだめ、こんな暗いのに。どうせ買い物に行くついでだから」

「いいって。歩いてもすぐだから」

「すぐって、渡部君の家、山手のほうでしょ？ ほら、早くして。ほかの先生の
分も買い出し頼まれてるんだ。のんびりしてたらみんなに怒られちゃう」

上原は車の鍵をポケットから取り出すと、俺をせかした。ここでごたごたして
ほかの先生が出てきても困る。俺はしぶしぶ車に乗りこんだ。

「気にしてくれなくてもいいのに」

上原はエンジンをかけると、そう言った。

「気にはしてない」

そうだ。ただ、このまま明日になるのはよくない。そう思っただけだ。

「ジローなんかさ、先生たちがどこの学校行くのかって教育委員会が決めてる
の？ ってあのあと【B】で訊いてきたぐらいなのに」

上原は笑った。あいつならやりそうだ。いい意味でも悪い意味でもジローは無
神経だから。

「あいつは馬鹿だからな」

「だけど、⑤ああいうふうになれたらいいよね」

馬鹿で単純でお気楽なジローみたいに？ そう眉間にしわを寄せる俺に、上原
は「記録会の時にさ、ジローのお母さん差し入れにお茶をくれるんだ」と話し出
した。

「何の話だよ」

「私、スポーツ飲料が苦手なんだ。ジローにそう言ったわけでもないのに、そう
いうことがお母さんに伝わってるってすごいと思う」

「俺にも差し入れに、お茶持って来いってこと？」

「違うよ。ジローは私を顧問と認めてくれてるってこと。ジローにしてみたら、
何もできなくても顧問をやっていたら、それで十分顧問なんだよ。なんでも認め
られる。それがジローの強みだよ」

「俺に何かアドバイスしてるつもり？」

そんなこと上原に言われなくても、知っている。がさつで優雅さなんてどこに
もない。知的でもなければ(c) センレンもされていない。それなのに、愛され
て恵まれて育っているのがよくわかる。決定的に俺より容量がでかい。それがジ

ローだった。

「⑥まさか。渡部君には渡部君のよさがあるでしょ」

「俺のよさね」

俺は(d)鼻で笑ってしまった。自分なりのよさだとか個性だとか便利な言葉
だ。本当の自分がないどころか、つくろったところで俺には長所なんて一つもな
い。

「私、教師になっっているんな生徒を見てきたけど、その中でも渡部君が一番
そこまで言って、上原は笑いだした。

「何だよ？」

一番、理屈っぽい、面倒臭い、嫌味っぽい、冷たい、嘘くさい。俺は思いつ
く限りのことを頭に浮かべた。

「いや、一番中学生っぽいなって」

「中学生っぽい？」

「そう。自分らしさとかありのままの自分とか、自分についてあれこれ考えるの、
いかにも中学生でしょ」

褒められているのかけなされているのかは、わからない。でも、なんだか上原
は楽しそうだし、くすぐったい言葉ではある。

「⑦あ、こいで降ろして」

知らない間に、家に近づいていた。俺は家の前の道に入る手前で、慌てて上原
に言った。

「おばあさん心配されてるだろうね。遅くまですみませんって伝えといてね」

上原は俺の言うとおり車を止めると、そう言った。

「おばあさん？」

「うん。おばあさん。それぐらい、家庭調査票に書いてあるよ。じゃあ、明日」
上原はそう言って、俺に手を振った。

注 *駅伝大会——リレーで行われる長距離競走。この地域の大会では、十八キ
ロを六人で襷(肩)からななめにかける細長い布きれ)をつない
で走る。

*タイムトライアル——大会同様のペースで走り時間を計測すること。

問1 —— (a) (c) のカタカナを漢字に直しなさい。(a) は送りがないをふく
めて書きなさい。

問2 —— (b) 「面喰らっている」(d) 「鼻で笑ってしまった」のこの場面の
意味として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

(b) 「面喰らっている」

ア、裏切られたことを残念に思っている様子。

イ、急なことに怒りをにじませている様子。

ウ、突然のことに驚きとまどっている様子。

エ、初めてのことに緊張している様子。

オ、本当かうそか判断しかねている様子。

(d) 「鼻で笑ってしまった」

ア、馬鹿にするように笑ってしまった。

イ、うれしくなって笑ってしまった。

ウ、はずかしそうに笑ってしまった。

エ、得意げになって笑ってしまった。

オ、いとおしむように笑ってしまった。

問3 【A】に入る語として最も適切なものを次の中から選んで記号で答え
なさい。

ア、うけたまわる イ、うかがう ウ、おっしゃる

エ、さし上げる オ、お聞きになる

問4 【B】に共通して入る四字熟語として最も適切なものを次の中から選
んで記号で答えなさい。

ア、疑心暗鬼 イ、喜色満面 ウ、無我夢中

エ、興味津々 オ、戦々恐々

問5 —— ①「上原が遠慮がちに言った」とあるが、なぜ上原先生は遠慮がちに
言うのか。その理由を十字程度で答えなさい。

テスト1の3

問6 ― ②「俺は胸の中がひんやりした」とあるが、「俺（渡部）」がそのように感じたのは、梶井の言葉をどのようなものとらえたからか。適切に言い表している部分を、本文中より十字以内でぬき出して答えなさい。

問7 ― ③「俺はジローを振りきると、グラウンドを出た」とあるが、この時の渡部の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア、チームの危機にも関わらず、勝利にばかり気を取られているジローに嫌気が差している。

イ、みんなとはちがう、個性の強いジローと自分が襷をつなぐことに不安を感じている。

ウ、メンバーの空気を感じ取れない、無神経なジローとは仲を深めたくないと怒っている。

エ、意外にも自分の言っていることを理解できないジローを、ひどくばかにしている。

オ、自分が説明しても、みんなのぎこちない雰囲気（ふんいき）に気付かないジローにうんざりしている。

問8 ― ④「このまま」とあるが、渡部が考える「このまま」とはどのような状態のことか。メンバーと先生それぞれにふれながら四十字以内でわかりやすくまとめなさい。

問9 ― ⑤「ああいうふうになれたらいいよね」とあるが、上原先生が言う「ああいうふう」とはどのような人のことか。本文中の語句を利用して二十字以内で答えなさい。

問10 ― ⑥「まさか。渡部君には渡部君のよさがあるでしょ」とあるが、ここで上原先生が考える渡部の「よさ」とはどのような点か。本文中の語句を利用して二十字以内で答えなさい。

問11 ― ⑦「あ、ここで降ろして」とあるが、渡部がそのように言う理由を本文中より四十五字以内でぬき出し、初めの五字を答えなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

映画「マイ・フェア・レディ」の原作は、バーナード・ショアの*戯曲（ぎきょく）『ピグマリオン』ですが、ロンドンの下町のコクニーなまりの花売り娘（わすめ）を、話し言葉を徹底的（てつていてき）に特訓することで上流階級のレディにしたとあげるという物語です。ロンドンの下町といえば、今でも（a）ドクトクの発音で、同じイギリス人でも何を言っているのかさっぱりわからないというほどの別世界です。

これぞ極め付けというコクニー娘の、発音、発声を矯正（きようせい）、なまりを直し、上流階級の人々のアクセントやイントネーション、言葉づかいを身につけさせ…さらに、立ち居振る舞（ま）いを訓練し、最後は、すばらしいファッションで決めて……。

最下層の花売り娘から、謎（なぞ）の王女様へ。

【A】ショー先生のこの戯曲は、筋金入り階級社会の大英帝国への風刺（ふうし）に満ちて、俗物（ぞくぶつ）の上流階級の形ばかりの①付け焼刃（やけど）を皮肉（くご）っているのですが、主人公イライザの（b）ヒミツを暴（あば）こうと聞き耳をたてる人たちの前で、彼女の言葉は、完璧（かんぺき）に彼らを欺（あざむ）きとおします。

言語学者ヒギンズ博士にイライザが言葉づかいを直してほしいと頼みに行くとき、彼女はこう言います。

一生、市場のしがない花売り娘でいるつもりはない。上品な言葉づかいを習って、もっといい人生を送りたいのだと。

②彼女にとつて、美しい言葉は、上流社会へのパスポートなのです。どんなに最新のブランドで固めた高価（こうか）な身なりで、豪華（ごうか）なレストランで食事をしているも、言葉づかいはその人の生まれ育ち（うちは）を雄弁（ゆうべん）に語ります。

今の日本は、十九世紀のロンドンのような明快な階級差別もなく、日本中どこにいても、みんなが同じテレビを観て、同じような言葉を話す社会ですが、それでも、話し手がどのような生活を送っていたか、また送っているかはうかがい知ることができます。

【B】特にこれといった（c）フツゴウがない限り、イライザのように、向上心を持ち続けていないと気づかないかもしれません。

名古屋 東海中学校（平成25年度）

とりわけ、携帯メールの普及（ふきゅう）以来、キチンとした文章を書くのが苦手という人がとても増えました。

何を書くにも、単語を並べるだけ。キャッチコピーが見出しだけ、絵文字だらけのコミュニケーションです。

そういえば、日本にも、ワンワードポリティックス、ひと言劇場で国の政治を思い切りあらぬ方向に引つ張（ひ）っていったお方もかつて③いらつしやいましたっけ。

そして、それに熱狂（ねつきやう）した日本中の人々。

テレビ時代を経てネット時代へ。

黙（だま）ってテレビの前に坐（すわ）って、ただ与えられるままの一方通行コミュニケーションで、自分がどう考えるか、感じるか、それをどう表現するかという能力は、残念ながら、日本国中恐ろしく低下（げい）しています。

発声、発音、なまり、アクセント、イントネーションといった形だけは直せても、その根本に意識や考え方、感じ方の問題がありそうです。

きれいな日本語を話したいというとき、それは形だけではなく、言葉そのものへの向きあい方もふくめて考える必要があります。

美しい日本語には気品があります。

その気品とは、どこから来るのか。どういうことなのか。

もし、そうした日本語を話すようになれば、自分はどうのように他の人の目に映（うつ）るのか。

美しい日本語とは、単に形をいうのではなく、話す人の人間としての存在感（そんざんかん）や質（しつ）、力を表現するものなのでしょう。

感情に流されず、思いやり、品位、やさしさに満ち、謙虚（けんきょ）で明るい。

そうした思いを表現するために、それではどれほどの言葉が蓄積（ちくせき）されているか。これまでの人生で、そして、毎日の暮らしの中で、何を見、何を読み、だれと何を話しているか。

人が話す言葉は、その人がそれまでの人生をどう過（すご）してきたかの集大成です。それでも時折、若い方で、とても端正（たんせい）な美しい日本語で、大人としっかりお話をなさる方に会えることもあります。

どこへ出ても堂々として、気持ちがよく、うれしくなります。

もちろん、どこでも、大歓迎（かんげい）を受け、面接なども高得点です。

こうした人たちに共通していること、それは、大人たちとしっかり、まじめな話を日常的にしていることです。

いちばん身近な大人は、親です。

毎日の生活で、親とどんな会話をしているか。

勉強（べんきやう）しなさい。ご飯食べなさい。お風呂に入りなさい。

④これは会話とは言いません。これで父親が「メシ、フロ、ネル」では、子どもに日本語の美しさなど薬にたくても伝わるものではありません。

高齢（こうれい）の方に対しては、介護（かいご）や認知症（ちにかいしやう）の心配ばかりが先立って、交（か）わす言葉も子どもに対してのような片言（かたご）まじり。その方の生きてきた歴史や、重ねてきた（d）ギョウセキ、年齢の持つ深い知恵（ちえ）などへ尊敬（そんけい）を払（はら）うというごく当たり前のことが、すっかりなくなってしまう気がします。

言葉は伝承されるものです。親の生き方、価値観、ものの見方、感じ方を毎日の関係の中で知らずしらず学び受け継いでいくものです。

世界のこと、環境（かんきやう）のこと、未来のこと、夢のこと、人間のこと、生きものたちのこと、美しいもののこと、善きもののこと、日本の伝統（でんとう）のこと、歴史のこと、生きる意味のこと、言葉のこと、いのちのこと、希望のこと……。

こうしたことを、親でなくても、先生でも、尊敬する大人でも、年上の方と、真剣（しんけん）に話す習慣があれば、必ず大人から子どもたちへ、美しい日本語は伝わります。テレビのバラエティ番組を観ているか、同世代の仲間うちだけで話す以外はメールの世界というのでは、いつまでたっても言葉は磨（みが）かれません。

素晴らしい文章の文学作品など、まったく読んだことがなく、マンガやテレビ、ネットの世界だけでは、美しい日本語をというの（e）ないものねだりです。

【C】⑤宮沢賢治の作品には、素晴らしい音と色彩と香りが広がっています。こんなに美しい表現があるのかと感動します。

夏目漱石（なつめそうせき）の文章には、やはり香りの描写（びやうしや）が、時に情緒的（じやうちよく）に、時に*官能的（くわんたいてき）に見られます。

川端康成、三島由紀夫、向田邦子、幸田文……。

古いから、面倒だからと毛嫌いして読まずにいる方が多いかもしれません。でも、携帯メールのように、短い絵文字混じりの文章ばかりに慣れて、面倒なものは読むもおつくうというのでは、⑥言葉はますます痩せていきます。

口当たりのいい柔らかいものばかりを食べていると、いつのまにか顎の筋肉も歯の機能も衰えてしまうように、これでは日本語脳も衰えるのは当然です。

ハリー・ポッターと宮沢賢治を比べれば、どんなに日本語が美しい言葉なのかどなたもきつと実感なさるでしょう。

美しい日本語の本を読む習慣を、ぜひ子どもときから身につけたいものです。そして、若い方には、⑦少し背伸びをした会話への好奇心を持って、手ごたえのある、尊敬できる大人をぜひ探してほしいと思います。

注 *戯曲―演劇の上演のために執筆された脚本や、上演台本のかたちで執筆された文学作品。

*官能的―性的感覚をそそるさま。

問1 ― (a) (d) のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ― (e) 「ないものねだり」の意味として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア、自分の力量を理解していないためにかん違いすること。
- イ、身近な他人の所有する物に大きな価値を見出すこと。
- ウ、実現できないことを分らないままに無理に願うこと。
- エ、わずかな可能性にかけるしかないと思きあせること。
- オ、元々この世には存在しなかったことにしようとする事。

問3 【A】【B】【C】に入るものを次の中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

- ア、でも イ、したがって ウ、もちろん
- エ、また オ、たとえば カ、さらに

問4 ― ①「付け焼刃を皮肉っている」とはどのようなことを言っているのか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア、蓄積や経験の重みが感じられないことを批判している。
- イ、さらびやかで装飾に満ちてそろぞらしいことをなげいている。
- ウ、外部の者に対するとげとげしい態度を不満に思っている。
- エ、冷静さが感じられないことを世に明かそうとしている。
- オ、一時の間に合わせにしては出来がいいと暗にほめている。

問5 ― ②「彼女にとつて、美しい言葉は、上流社会へのパスポートなのです」とあるが、どのようなことを言っているのか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア、都会の人たちの言葉づかいは、田舎育ちの彼女には一生がんばっても身につかないようなものなので、国境を越えたところにある手の届かないものであるということ。

イ、上品な上流社会の言葉づかいは、下町育ちの彼女がまったく備えていないもので、生まれ育ちをいつわり上流社会へ進出するためには必要なものであるということ。

ウ、質の良い上流社会の言葉づかいは、若い彼女には社会経験が少なくまだ身につけていないものなので、人生の成功の証としてぜひとも手にしたものであるということ。

エ、誰でも手にすることが出来る上流社会の言葉づかいは、要領の良い彼女にとつては隣国へ少し出かけるくらい、身につけるのが容易なものであるということ。

オ、階級社会での言葉づかいは、世界的に活躍したいと願う彼女にとつては道具のようなもので、別の国に移住するまでの一時だけ必要なものであるということ。

問6 ― ③「いらつしやいましたっけ」とあるが、この言葉を敬意のふくまれない言い方に直しなさい。

問7 ― ④「これは会話とは言いません」とあるが、筆者の言う「会話」とはどのようなものか。最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア、日常の当たり前のことを語るのではなく、まじめな話をするためのもの。イ、必ずしもかみ合っている必要はないが、生活に必要な情報を伝えるもの。ウ、生きていくために必要不可欠な話題を、お互いが根気よく繰り返すもの。エ、単語を並べただけのものではなく、お互いのものの考え方を伝えるもの。オ、単語の並び順をよく考えて並べて、相手に自分の考えを納得させるもの。

問8 ― ⑤「宮沢賢治の作品には、素晴らしい音と色彩と香りが広がっています」とあるが、次の宮沢賢治の童話『風の又三郎』の傍線部で表されているのは、何のどのような様子か。十五字以内で答えなさい。

どつどつ どつどつ どつどつ どつどつ
青いくるみも吹きとばせ
すっぱいかりんも吹きとばせ

どつどつ どつどつ どつどつ どつどつ
どつどつ どつどつ どつどつ どつどつ

問9 ― ⑥「言葉はますます痩せていきます」とあるが、筆者はどのようなことをおそれているのか。その説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア、現代の若い人たちは古い書物を読む機会がほとんど無いうえに、活字の多い本を読むことの意味を教えられていないので、美しい言葉が学ばなくなってしまうこと。

イ、自分の考えを表明する言葉を身につけることが難しい社会であるうえに、日常の中で言葉に向き合おうとしていないので、言葉を受け継げなくなってしまうということ。

ウ、言葉づかいの乱れが気にならない人が多くなっているうえに、教科書に有名な作家の作品が載らなくなっているので、名作に親しみが持てなくなってしまうこと。

エ、他人と顔を合わせて意見を交わす機会が少なくなっているうえに、絵文字ばかり使って気楽な会話しかしていないので、言葉は変わりはてた姿になってしまうこと。

オ、若者たちは大人と話をする機会が少ないうえに、日常生活が忙しく正しい言葉づかいを考える時間もないので、心身がきたえられていないままになってしまふこと。

問10 ― ⑦「少し背伸びをした会話」とあるが、どのような会話か。「会話の相手」「その時の態度」「伝えられるもの」をふくめて、本文中の語句を利用して二十字以内で答えなさい。

問11 ― 「美しい日本語とは、単に形をいうのではなく、話す人の人間としての存在感や質、力を表現するもの」とあるが、これに当てはまる日本語の具体的な例を一つあげなさい(ただし、単語、文などのかたちは問わない)。また、それが「美しい」と思う理由を、誰がどのような場面で話したかにふれて六十字以内で答えなさい。

【メモ用紙】

この用紙は、提出の必要はありません。

